2021（令和 3）年 1 月 6 日
「ハワイ語の空間表現：方向詞を中心に」
発表者：岩崎加奈絵（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所特任研究員）

ハワイ語において空間表現に使用される要素にはさまざまなものがあるが、そのうち特に機能語、または closed class と見られるものには、多義的な前置詞のほか、指示詞・位置名詞・方向詞が考えられる。本発表ではこの 3 つの要素について取り上げ、それぞれの基本的性質を説明しつつ、方向詞に関してはとくに着目すべき点を挙げた。

まず、ハワイ語の指示詞は、内容語に対する位置により前置指示詞と後置指示詞に分けられる。前置指示詞はさらに k 系とその他との 2 つに分けられ、k 系は話し手近く・聞き手近く・両者から遠くの 3 語を含む。その他については ua、ia、nei などがあるが、こちらは空間用法というよりも、前方照応用法が基本である。いっぽう、後置指示詞には lā/-la や ala、nei があり、主に前方照応的な役割のほか、テンス・アスペクトを表示する際や、時間表現などに使用されるため、空間用法とは直接関係しているかどうか不明瞭な要素であるといえる。

次に、位置名詞は所有形で示されるランドマークを基準とする相対的な位置関係を表示するものであり、waho「外」、loko「中」、luna「上」、lalo「下」、mua「前」、hope「後ろ」、kai「海側」、uka「山側」などがある。イディオム的な用法も多分に含むとは言え、空間表現、とりわけ移動表現の多いテキストにおいても、絶対的方向表現（東西南北など）に比べ圧倒的に高頻度で使用されている。

方向詞は、「モノの存在する、または行為が行われる『地点』」を示す位置名詞に対し、行為等自体のもつ「向き」を示す役割を持つ。具体的には aku “away from”、mai “toward”、a‘e “upward”、iho “downward”の 4 語があり、名詞句でも動詞句でも出現するが、必須の要素という訳ではない。空間表現としての機能自体は明確な方向詞だが、その使用規則・傾向については不明瞭な点があり、本発表では 2 つの論点を提示した。第一に、使われやすい・使われにくい（あるいは使われない）状況や条件、環境の有無自体がほとんど論じられていないという点である。第二に、誰から見た方向が動詞にマークされるかという点も、同じく十分議論されているとはいえない。これについては主語の選択・交替とも関連付け、「語り」の中での変化を追う分析が必要である。

これに加え、本発表では、ハワイ語において、あるいはハワイ語と関連して起きた空間表現の変化についても簡潔に言及した。具体的にはいわゆるピジンハワイ語における方向詞の変化、および文献の書かれた年代による方向詞使用頻度の違いについて述べ、後者については現代のテキストの方が、20 世紀初頭までのテキストにおいてよりも僅かながら頻度が低下していることを示した。

最後に今後の展望として、上で述べた、ハワイ語文献資料のある種の「語り」の構造に着目しての空間表現の分析や、近隣の言語との比較研究を行っていくことを述べ、結びとした。